

高校闘争から半世紀シンポジウム(2020年2月11日、東京・連合会館)に参加された皆さん！

高校全共闘運動の半世紀を記念する

記念するとはどうすることか？ 記念するとは、現在の立場を明らかにすることである。高橋和巳は全共闘運動を「欺瞞に対する根底的懐疑を通じての集団的規模における意識変革運動」だとし、革命は「人間それ自体の変革が含まれていなければならない」とも述べている。意識変革、人間変革は、変革の運動それ自体のなかでしかなしえない」と指摘した(「わが解体」一九七一年)。われわれは何を変え、何を變え得なかったのか。当時、プロレタリア、国際主義と革命的暴力と呼号していたのが今では「非暴力」、当時は戦後民主主義批判という観点だったのが「護憲」と言い出す——これでは誰からも信を得られまい。代理告発や、ひどいわ主義の無惨な結末が証明したとおり、代弁や弁解でなく本音で対決しなければ同志になれず、なれあいは仲間殺しの猛毒である。一切の懐古や馴れ合いを拒否し、歴史の責任を果たそう。

二〇〇七年三月、全学連・全共闘・学生運動OBの共同声明。趣旨に賛同しつつも私はひとつの問題提起として「学生運動の「OB」とは何か」を書いた。【××〇〇(××年、△△大学自治会代表)、という署名をならべて、「私たちはかつて、学生運動という形で、政府や権力を持つ者の動きに異議申し立てをし、その暴走を食い止めようとしました」ってねえ……。これって「オレは〇〇連隊でね」「××上等兵どの」などという祖父の代の醜悪な話と同質のものを感じてしまう。要は、オレも若いころはブイブイ言わせて、やったものよ、という飲み屋談義とどう違うのか。なぜ、今やっていることを記さないのか。ハケンやニート、失業者として(68年)を生きつづけている人が『共同声明』したほうが、私はカッコいいと思う。】

二〇一二年七月、『高校紛争 1969-1970』(中公新書)の出版を祝う会を東京・小石川

作間信彦『仙台二高で闘った僕たちの軌跡 大衆運動の研究』*は素晴らしい過去を振り返る目的は現在を闘う糧を得るためである

本書は仙台一高闘争の総括の書である。発刊の動機は何か。著者は次のように記す。

2011年、「3・11」に直面し、福島の核惨禍の張本人でありながら、被害者に対して加害責任を居直り続ける東電をはじめとする資本家階級とその利害を体現する帝国主義的政権を追及する大衆運動の魅きが必要と私は考えました。(中略)この「大衆運動研究」の目標は、加害者の責任を追及する大衆運動を粘り強く作り上げてゆく手がかりを「成功した高校生の大衆運動」から発見し、役立つような教訓を、明らかにすることです。(1ページ、はじめに)

では、その「成功した高校生の大衆運動」としての仙台一高闘争とは何だったのか。

仙台一高闘争とは、一九六九年の制服廃止闘争を突破口にし、五年にわたってのべ二、三千の生徒が参加した、選別教育批判とベトナム侵略戦争

で開催した。これは川嶋康裕さんと私が著者の小林哲夫さんと企画し、大谷行雄、岡村俊明、千坂恭二、安田宏——の諸氏と共に呼びかけたものである。私は、当日の挨拶で、「七〇年二月には中村克己が日大で殺され、七五年六月には釜ヶ崎の仲間・船本洲治が嘉手納基地で焼身自決——彼らの無念を思うとき、私はこの戦争はけつして終わっていないと思う(中略)「戦争は終わった」とするさまざまな終戦派同窓会にけつして与することなく生き抜く」こう、と挨拶した。

<http://www.teishensha.com/zenkyoutoh/koukousei-undou2012b.htm>

二〇一五年九月、『日大闘争の記録Vol.6』に、私は「千年王国の夢、いまだ覚めず 日大全共闘に憧れた高校生のその後」という文章を書き(2面参照)、「こんどやるときには、ホンモノを！再び三たび全共闘叛乱を！」と書いた。

『校則だから従え』という体制側の強制への疑問と抵抗感から出発し、自由の抑圧者の資本主義社会と学校当局に対して一人の人間として向き合い、当たり前前権利を守り実行するために、教育現場において「真剣勝負」を何度も挑んでいった(中略)校内に築かれた「監獄並みの束縛の鉄鎖」を自主的に集団で活動した大衆運動によって破壊し、自己解放したという醍醐味を味わった(中略)この様な体験を通して多くの生徒が主体性と度胸を兼ね備えた人間に生まれ変わり、社会に出ていった(96-97頁、あとがき)

著者は、この闘いから得たものを総括しているが、私が、もつとも強く共感し、同意したのは次の三点である。

第一に、真剣で徹底的な討議の持つ力である。

著者は話し合い路線に対する闘いを振り返って「根源悪を曖昧にして馴れ合うのなら対話は存在しませんし、進歩のためには根本にある間違いや矛盾が何かを見定め、それを徹底的に明らかにすることが必要なのです」(52ページ)と記す。以降、連合赤軍のリンチ事件を引き合いにして、「違いについてこだわりすぎるから分裂や対立が起きる、論議はほどほどに」という主張が少なくない。しかし、闘う高校生たちは当時、徹底的に論議した。著者は、相互批判という弁証法の生命力について、次のように記す。

若かった私たちの「輝かしい時」は、寄せ集めの偶然の出会いの中ではなく、信頼し合った友人達との創造の内にあつたのです。(中略)新しいものを生み出す努力の過程のなかで、本音を聴いてくれて、深刻な心のうちまで話せ、支えてくれるような友と出会い、団結することによって、過去の自分や、自身の限界をも乗り越えていくことができた(96ページ)

第二に、学友を信頼し、大衆を信頼するという立場に立つことである。著者は当時の自分たちの考えを振り返って次のように記す。

私たちの考えは単純なものでした。要約すると『みんなは自分たちと同じ社会的存在だ。彼らも私たちを自分らと同じとみるだろう。だから私たちの主張を彼らは必ず分かってくれる。正しいことをわかりやすく伝えることで小さい変化が起こればいい』。そして『この小さな変化を大きな変化にしていく努力をするのだ』ということでした。(61ページ)

人間には、一人ではできないことがあるからこそ、助け合うことが人を結びつけます。助け合いの協力を実現していくためには、「相手の意見をきちんと受けとめ、それを踏まえた上で自分の意見を言う」話し合いが不可欠なのです。(93ページ)

うことである。著者は「第三章 結論」で「一人でも少数でも行動し始める意義」を強調するとともに、学友大衆との関係を次のように記している。社会的活動の土台には、一高闘争の最前線に存在し続けた私たち積極的集団の「先走ることなく、立ち後れることなく」「流されることなく、流れを作り出す」「案内人」的役割を意識的に保持した姿勢があつた(82ページ)

それまでの自然成長的な環境に規定された独特の偶然の出会いの中ではなく、信頼し合った友人達との創造の内にあつたのです。(中略)新しいものを生み出す努力の過程のなかで、本音を聴いてくれて、深刻な心のうちまで話せ、支えてくれるような友と出会い、団結することによって、過去の自分や、自身の限界をも乗り越えていくことができた(96ページ)

『帝国海軍反省会』のように！

今年一月二日付の『毎日新聞』に「悼む 革命バカ一代」反骨魂」という記事が載った。昨二〇一七年一月一日に亡くなった塩見孝也さんに対する権野礼仁さんの追悼文である。そのなかで六〇代で初めて労働を体験した塩見さんの言葉が引かれて、次のように書かれている。「二日の労働をやり遂げた後、湧き起こってくる、何とも言えない満足感、達成感ともいえる喜び」／支援者や袂を別つた元同志たちに、賛否両論の議論を呼んだ一文であつた。

私たちが全共闘が反省すべきはむしろ、労働こそが基底的階級闘争であることをあまりにも(頭でも身体でも)知らなかったことにあるのではなかつたか。亡くなった塩見さんの言葉はきわめて真つ当であり、これを難する「元同志たち」はあまりにも生きる権利としての労働を軽視してはいなか。

先に、紹介した「1970年ころ仙台一高で闘った僕たちの軌跡」がすばらしいのは、現在も闘いの炎を燃やし続けていることである。

この数十年、外野席からは高校生の自主的活動が見えなくなつて久しく、何もないようにも見える状況に私の感覚も慣れていた中で、「なにか新しいもの」が発生しつつあると思えるようになりました。具体的には、ブラック校則への中高生の疑問が噴出し始めたこと、そして、文科省の反動的な入試制度「改革」に対して、高校2年生が反対の思いを関係者に伝えるために自主的に署名集めと対文科省直接行動に立ち上がり改悪撤回にまで進んでいます。さらに最新のニュースによると、原発事故での被曝の脅威から自主避難した福島の高校生が勇気を出して深刻な被曝問題の社会的焦点化を訴えました。(後略)(95ページ、あとがき)

第三に、変革を成就させるためには組織が必要であり、それは少数の個々人から始められるとい

断的、「一匹オオカミ」的考えと行動という安易なありかたを意識的に克服し、仲間同士で相互に協力し合い作り合うという方法を体得していく道を選択した(89ページ)

全共闘運動の敗退以降、組織ぎらいの気分が蔓延しているが、仙台一高闘争の歴史的な実践と経験は、闘いのためには組織が必要だということを事実で裏づけている。

いずれも闘ったからこそ得られた教訓である。

正面からの総括こそ歴史的な責務であるのだと再認識させられる。本書で、著者は次のように呼びかけている。

現実を変えるためのさまざまな企てが成功するか、失敗するかは(中略)二の次なのです。失敗した場合は、基本的には対象認識に欠陥があることが実証されたわけですから、認識の誤りの原因を究明し、訂正したところの認識に基づいて、理論を現実に適用するために新たに挑戦していけばいいのです。(83ページ)

畏友川嶋康裕さんは(全共闘)総括は『帝国海軍反省会』のようにやればよい」という。賛成だ。帝国海軍反省会とは何か。大日本帝国海軍軍令部、第二復員省OBが一般には公にせず組織した旧海軍学習グループであり、事実を検証して反省する論議を行った。一九八〇年から九一年まで11年間にわたって催された会は131回を数える。録音は全四〇〇時間に及んだという。二〇〇九年八月に『NHKスペシャル 日本海軍四〇〇時間の証言』として放映され、また『証言録 海軍反省会』全11巻(PHP)として出版された。

立場が違つても、大切なものは社会的生命である。真剣に闘つて、その闘いは勝利したのか、敗北したのか。敗北ならば、反省すべきは何なのか。これを生涯かけて総括し、記録し、後に続く闘う人びとに伝えること。ここに、過去の運動を記念する唯一の意義があり、戦後責任がある。

闘いの仲間を人間として仲間として捉えることができず、ただ選挙の時の一票としか捉えられない共産党を、全共闘は批判したはずではなかつたのか。集会やデモの動員の一人としか捉え得ず、目先の人数集めに追われるなら、同罪である。「運動がすべて」というベルンシュタイン主義の誤りは、いまだに日本の社会運動に存在し続けている。私たちは、自らの闘いの教訓を、真摯に総括し、後世に伝えるという社会的責務を負っている。

*『仙台一高で闘った僕たちの軌跡』書籍代金500円送料180円合計680円、公式Webサイトは<https://sakuma-ichikou.com/> ※連絡は左記サイトの問合せフォームから

千年王国の夢、いまだ覚めず 日大全共闘に憧れた高校生のその後

前田年昭（1969年灘高校入学・日雇編集者）

私の中学三年間は一九六六―六九年で、中国の文化大革命や日本の全共闘運動とびつたり重なっていた。素晴らしい時代で毎日がとても楽しく充実していた。全共闘と文革は私の夢であり、希望だった。「夢は昼みるもの」という、永山則夫の私設夜間中学運動の高野雅夫さんから教わった言葉がある。夜みる夢は朝になれば覚めてしまうが、昼の夢はいつまでも、そして今もお覚めることがない。

矢崎薫さんが「全学共闘会議という組織ではあるのだけれど、それぞれ自分のやり方で闘争を進めていました」と証言している（インタビュー「日大全共闘って、なんて不思議な集団なんだろう」、「日大闘争の記録」Vol.2）。そう、同じように、高校生たちもまた、日大全共闘に勝手に影響され、日大闘争をそれぞれに解釈し、てんでに「自分のやり方で」闘争を進めていたのである。

私もまたそのひとりだった。私は現代史研究会というサークルを立ち上げ、中村克己虐殺糾弾の記事を載せ、銀ヘルや黒ヘルにあこがれる日々だった。正しい。カッコいい。強い。つまり、闘いの大義と大衆性、戦闘性に惚れ込んでいたのである。

六九年春、灘高校へ進学した私は、東大進学一辺倒の学校のあり方に疑問をいだき、自分自身はそれに与しない生き方を選ぼうと考えようになった。学校教育に対する疑問は日に日に増した。問いと正解をセットで覚え込み、問いを見たら条件反射で「正解」を取り出すありさまは、まるでパブロフの犬。この訓練で人間をしつけることは、官僚や兵士を作るために好都合だろう。疑問を持つこと、自分で考えることは抑圧され、いつか自己規制するようになる。学校教育は間違っている。こんなのは学問でも何でもなし。差別と選別のこの受験教育体制は近代日本の背骨として、敗戦で途切れることも

なく続いてきた。日大闘争を先頭に、全共闘運動はこれのおぞましい教育体制を揺るがし、変えようとした。一九六九年一月の安田講堂攻防戦の後、全共闘は退潮に向かっていくといわれた。

しかし、六九年の東大入試中止は、全共闘による教育体制の「終末と再生」への私の期待をいっそう高めた。数年にわたり学校を止めた中国のように、日本もいよいよ本格的に学校の停止という革命へ向かうのではないかと思えたからである。

千年王国——そう、日大闘争は私の千年王国だった。明治以来の競争社会と差別教育の世は終末を迎え、新しい社会、新しい教育が再生するのだ、と。むろん、終末と再生をうたう千年王国とは厳密にはキリスト教の終末論であり、ヨハネの黙示録に根拠づけられる。しかし、地上の天国”を掲げた中国の太平天国の乱も、”三千世界の立替え、立直し”を唱えた大本も、思想的には通じあう。太平天国については三石善吉が、大本については安丸良夫がそれぞれ千年王国思想との強い類似を指摘している。

日大全共闘は強かった。志村道夫さんとの対談で池上宣文さんが「勝負つてやつは、まず気合いだ」と語っている（『日大闘争の記録』Vol.2）が、信じる者は強く、闘う者は美しい。徒党を組んだ人間の組織が志気高く闘えば無敵である。

無敵の日大全共闘をまねた高校生もまた強かった。私の関わった一例を挙げれば、学校新聞に万博への「問いかけ」記事を載せただけで、学校当局は万博見学予定を中止にしたのだった。もつともその裏の経緯は三〇年以上経ってから知ったわけだが、なるほどベンは強しである。

千年王国をめざした歴史上の叛乱と運動もやがては敗北する。私の千年王国、日大闘争にも終わりがやってきた。全国全共闘である。六九年九月の全国全共闘結成は、新左翼と大学全共闘の界限では発展として歓呼で迎えられてい

た。しかし、私はどこかきめていた。勝手に「自分のやり方で」日大闘争を進めていた私は、全共闘も終わつたな、と思った。なぜか。トップが東大でサブが日大、その下に新左翼の各党派という組織的布陣は、現代資本主義体制下のものもろの組織とまるで同じ、うり二つだったからである。こんなじゃダメだ、戦闘性と大衆性において全国の中高生全共闘の圧倒的な憧れの的であった日大をなぞトップにしないのか。これまで立ち上がれなかったところから闘い始めた中学生や夜間高校生をなぞトップにしないのか。価値序列が同じ組織に体制変革が出来るはずがないではないか。

太平天国も大本も当初は、規律と志気は高かった。そこに人びとは既存体制とは違う人間関係が生み出されようとしていたことを見て取ったからである。その事実が人びとを惹きつけたのである。闘いの組織は、その組織がめざす社会のミニチュアでありモデルである。差別と選別の社会に「終末と再生」をもたすためには、まず真つ先に組織のなかで差別と選別に終止符を打たなければならぬ。全共闘運動の素晴らしい功績のひとつは、口先で革新を称しても事実（生き方）として革新でないという「革新」の化けの皮を剥いだことであり、そんなモノは信じられるか、というわけである。

かくして、私の千年王国たる全共闘はどこへ行くべきか、全共闘自身の「終末と再生」が必要なのではないか。学生活動家たちが、まず「大卒」の身分を確保し、しかるのちに活動をというのは、二股主義ではないか。翌七〇年六月、灘高の全校集会は「ストライキ権を確立した上で全日討論集会を行う」提案を可決。私たちは全学闘争委員会を結成し、私は基調報告 <http://www.teishensha.com/zenkyoutoh/70zentou.htm> を起草した。マスコミは「灘高の受験体制が揺さぶられた！」（サンデー毎日）、「灘高」造反に揺らぐ」（サンケイ新聞）などと書き立てた。

すでに学生全共闘は、弾圧などの外因によってではなく、二股主義という内因によって「退却」し始めていた。入試や定期試験の全廃は難しく、受験体制の「終末と再生」は遠のきつつあったが、闘いを止めるわけにはいかない。七一年春、私は中途退学し、下放した。以来、わずかの自営を除いて、今なおフリーターである。土方、工員を経て校正や編集、組版でメシを食ってきた。

四〇年以上経ってまた最近、元全共闘の闘士たちの名を目にすることが少くない。二〇〇七年には憲法九条改憲反対の「全学連・全共闘・学生運動OBの共同声明」が出された。並べられた肩書きには××年××大学自治会委員長、△△年△△大学全共闘議長などあり、ふた世代前の大日本帝国陸海軍の戦友会みたいで、なんだかなあという感じである。こっけいである。俺も若い頃はブイブイ言わせて、やったもんだ、という飲み屋談義とどこが違うのか。なぜ、今を記さないのか。フリーターならフリーターと書いたほうが全共闘精神にかなっているではないか。そう考えるのは私だけではない。「OB」を連ねた声明を見た私は、全共闘も死んだな、と思った。かつて大好きだった全共闘、いまや腐臭を放って死滅しつつある全共闘への挽歌として、私は「学生運動の「OB」とは何か」<http://www.teishensha.com/zenkyoutoh/ob200704.htm> を書いて批判した。

高校全共闘は中退すれば中卒である。ひがみだと言うならそう言うがよい。竹内好はかつて「指導者意識の根は民衆にある。指導―被指導以外に人間関係がないのだ。自分が一高―帝大へゆくか、そうでなければ一高―帝大に劣勢意識をもつかで、第三の道がない。ドレイカ、そうでなければドレイカの主人かだ」と書いたが、今も何ひとつ変わっていない。全共闘は新旧左翼の選良主義を批判したのではなかったのか。全共闘の初心はどこへ行ってしまったのか。何と情けないことか。

二〇一二年、小林哲夫さんの「高校紛争 1969―1970 『闘争』の歴史と証言」が出た。出版を祝う会で私は「この戦争はけつして終わっていない」<http://www.teishensha.com/zenkyoutoh/koukousei-undou2012b.htm> と挨拶し、「オレも若いころは……」としたり

顔して喋り散らす一部の学生全共闘とは違って、高校生全共闘には終戦もなければ懐古趣味もないということ、私自身の所信として述べておきたい」としめくくつたのだった。

私の夢は、昼みた夢だったがゆえに、今なお覚めない。こんどやるときには、ホンモノを！再び三たび全共闘叛乱を！

やがて道の彼方の土埃が濃く大きくなり、歓声が聞こえてくると、興奮した犬や畜舎の家畜も騒ぎ始めた。沖繩と同じく赤い土埃の上がる道を群衆は駆けるようにやってきた。先頭に立っている神懸かり者の姿は一カ月前と違わなかった。……埃をかぶった髪や髭は赤茶色に変わり、陽に灼けた顔は痩せてはいたが精悍だった。それまで態度を決めかねていた者たちも歓声を上げ、農場の労働者たちは腕を振り上げて神懸かり者を迎えた。その中でおじいには近づいてくる神懸かり者の表情に胸を衝かれた。その四十過ぎの男は、周りにこれだけの人がいることにまるで気づいていないようだった。たつた一人で、男は、世界が減びる、と小声でつぶやき、歩いているだけだった。

目取真俊「ブラジルおじいの酒」

参考

前田年昭「歴史をつくるのは誰か 下放、すなわちスタイルの根底的転換―文体革命を―」（今福龍太・鶴飼哲編『津波の後の第一講』岩波書店、二〇一二年）

これは次の初出文書の増補改訂である。

http://teishensha.com/KDU/gakumonron_kdu2011.htm

http://teishensha.com/zenkyoutoh/gakumonron_nada2011.htm

前田年昭「教育革命、いまだ成らず」（土屋昌明編著『目撃！文化大革命』太田出版、二〇〇八年）

<http://www.teishensha.com/CR/kyoukukakumei.htm>

前田年昭「死者は生者を捉え、妄想は遅れてきた全共闘を走らせた」（『ユリイカ』二〇〇五年

十一月号、青土社）

<http://www.teishensha.com/zenkyoutoh/nosaka0512.htm>